



幻想狸名鑑



【ニッ岩三郎（ふたついわだんやぶるん）】

ニッ岩神靈、ニッ岩巖王とも。日本三名狸の一角、佐渡相川のニッ岩大明神に祀られる。幻想郷では娘の姿でニッ岩猫蔵（マミゾウ）を名乗るが、雄雌の区別は定かではない。

出身は四国。平安末期に隠神刑部の名代として屋島三郎らとともに京都で暗躍し、摂津源氏源頼政に接触。紆余曲折を経て大妖怪鵜の後見人となる。その後刑部狸の元を出奔、鎌倉時代半ばには佐渡へと移住し、先住の貉達との抗争や協力を経て佐渡を平定した。

佐渡貉四天王を従えた後は海を越えて越後にまで支配を及ぼし、越国総鎮守一宮、宝徳山稻荷と熾烈に争った記録を残す。佐渡の金銀山を擁し金貸しとして財を築く一方、旅好きで知られ日本各地へ顔を出すことでも知られる。

太平洋戦争戦後の混乱期、狢師に撃たれて命を落としたとの噂を流して狸界より姿を消したが、高度経済成長期の中で人間に混じって投資を行い、さらなる財を築きあげていた。多摩騒動では静観を守り佐渡の中立を保ち、その後幻想郷へと活躍の場を移す。



【屋島の禿狸 太三郎(やしまのはげたぬき たさぶろう)】

日本三名狸の一角にして、四国八十八番札所の第84番、南面山千光院・屋島寺の守り神として祀られる古狸。生年は平将門が乱を起こした頃といい、御蔵千二百歳以上の古株である。伊予松山の隠神刑部が表舞台より姿を消して以来、四国狸界の最長老の座にある。

平重盛の恩より平冢方に加勢。屋島の合戦にも参加した。屋島総合狸大学においては創設以来一貫して理事長を務め、後進の育成にも多くの業績を残した。狐を平等に扱う温和で懐深い大人物であるが、同時に四国狸界の勢力争いに何度となく介入した強かさも併せ持つ。

大の人間好きでも知られ、日清日露の戦争には阿波の五代目金長、高松の白禿、松山の八俣お袖、壬生川の喜左衛門、佐渡のニッ岩団三郎らとともに若狸を率いて渡海し参戦した。

平成の多摩狸騒動では隠神刑部、六代目金長と共に多摩の狸たちの救援に向かうも、科学の進歩と共に妖怪を恐れなくなった人間たちの前にあえなく敗退。刑部狸の死と共に、隠遁した屋島にて長い休養を余儀なくされる。



【八百八狸総帥 隠神刑部（いぬがみぎよつぶ）】

伊予松山にて四国八百八狸総帥を自他ともに認める大狸。生まれは遡ること千五百年前ともいい、道後温泉でかの聖徳王を化かした伝説でも知られる。権謀術数にたけ、平安から室町にかけては自分の名代たる狸を日本の各地に派遣し、人間たちの動向を具に報告させていた。江戸時代に松山藩のお家騒動に介入し、稲生武太夫に討たれて以来は狸界の表舞台から姿を消し、「狗神」から「隠神」へと名を変えたが、四国松山は山口霊神にて隠然たる権勢をふるい、四国の狸達を操っていた。

多摩狸騒動で数百年ぶりに表舞台に姿を見せ、太三郎、六代目金長らと共に多摩の狸たちを指導、反攻作戦の指揮をとる。妖怪大作戦でその妖力が健在であることを示したが、術の反動で命を落とした。

……かに思われていたが、多摩に派遣されていたのは刑部狸の名代の別狸とも言われ、真相は定かではない。犬神中将という息子がいる。



【七代目金長（ななだいめきんちよう）】

徳島阿波の狸は武闘派で知られる任侠狸であり、元禄以来数百年にわたって、小松島日開野・津田浦穴観音の二派が抗争を続けてきた。そのうち小松島の日開野の元締めが金長狸である。因縁深き津田浦の六衛門狸との抗争、阿波狸合戦で初代金長は命を落とし、その子分狸であった藤の木寺の小鷹が弔い合戦で仇を討った。

戦後、小鷹が金長の跡目を次いで二代目金長を名乗って以来、金長の名は血筋ではなく実力で襲名するものとなった。現在の七代目は多摩鬼ヶ森出身の玉三郎という狸であり、多摩狸騒動の後、引退した六代目金長の後見によって襲名した。これは前例のない四国外の狸による金長襲名である。

まだ三十そこそこの若輩の七代目を侮る声も多いが、優しげな外見にはそぐわぬ強かさで古老たちの信頼を勝ち得、早くも金長の名を継ぐに相応しい大器の片鱗を見せ、若狸を中心に彼を慕うものは数多い。一方、不倶戴天の敵である八代目六右衛門狸はこの若き七代目を強く侮り、近年対立を深めている。



【芝右衛門（しばえもん）】

日本三名狸の一角。淡路島は洲本の柴右衛門大明神に祭られる。古くは屋島の禿太三郎との化け勝負でも知られ、一人で大名行列に化けてみせた化術の妙は各地の狸達の語り草となっている。

武張った四国の狸とは対照的に、淡路の狸たちは人懐っこく演劇が文芸を好む陽気な者たちが多い。それは人間好きで洒落者の彼の影響が大きいいえよう。

大阪は中座の芝居小屋に夫婦連れ立って訪れ、たびたび芝居見物をしていたことでも知られる。その大阪旅行の折に天敵である犬に噛み殺されて以来、柴右衛門大明神は演劇・演芸の神として大阪に祭られていたが、西暦二千年になって施設の老朽化を機に淡路の洲本大明神へと遷座され、淡路へ里帰りした。

いまは息子の芝助を筆頭にした淡路七狸とともに、洲本にのんびりと暮らし旨いものを食べ演劇見物にも出かける著名な文化狸である。インターネットにも造詣が深く、最近は携帯ゲームが趣味。

**no
image**

【證誠寺の狸衆（しょうじょうのびょう）】

上総国木更津は鈴ヶ森に住まう、しょうじょう寺の狸囃子伝説で知られる狸衆。証和大明神と名付けられた一門の総帥が姿を消して以後、一族をまとめる名狸が居らぬため、狸界の名門とされながらも勢力を保つことができず、衰退の一途をたどっている。

かつては軍港として栄えた木更津であるが、東京湾アクアラインの開通以来寂れてゆく中で狸たちへの信仰も失われ、いまの彼等は道端の飲み屋街にひっそりと暮らしている。

あまり知られていないが狸狐界の代表的遊戯である毛球の名門であり、得意の腹鼓と狸囃子による応援は狸であれば一度は耳にしたことがある。昭和の終わりに開かれた全国狸狐毛球大会では伏見稻荷の空玄狐率いる白狐チームとクライマックスシリーズに大接戦を繰り広げた。人間に化けて地元のチーム相手に試合をし、その顛末はTVドラマとなって放映された。

また、最近では地元のご当地戦隊ヒーローの怪人役などを務めており、その演技力から一部のファンから熱心に慕われている。

【東光寺の禅達（とうこうじのぜんたつ）】



佐渡貉番付東の筆頭にして、貉四天王の筆頭である大貉。徳和の東光寺の境内に社を持つ。本性は身の丈九尺を超える巨体を誇り、人に化けても巖のような巨躯の僧形である。代々東光寺の名僧、禅僧との公案や問答で修業を積んだ知恵者であり、いまは住職の代行を行うほど。隻眼だが、これはかつて教えを受けた東光寺住職に感服してのこと。一つしかない目はありとあらゆるまやかしを見抜くと豪語し、化術を無効化する禁断の反化術を切り札とする。境内の岩谷口は相川と通じる狸穴であり、団三郎の不在にあって貉総大将の代行として佐渡の貉達を統率している。

【湖鏡庵の財喜坊（いぎようあんのかうきほう）】



佐渡猪四天王の一人。加茂湖にほど近い新穂潟上の湖鏡庵に祀られる。猪うしからめ細身で糸目の容貌をしており、人に化けての姿も柔らかな物腰の青年である。一説では鼬の血が混じっているとも噂される。

佐渡の猪において最も幻術に優れ、四天王の中では知恵袋的存在。その力は加茂湖の雄大な風景と美しい水に深く結びついており、水鏡を通じて遠隔地の情景を映し出し、離れた場所へ人物を送り込むこともできる。そのような力もあって、佐渡各地の猪以外の妖怪変化との親交も深い。

【重屋の源助（おもやのげんすけ）】



佐渡貉四天王の一人。新町重屋にて源助大明神として祀られる。佐渡貉総大将・ニッ岩団三郎と妻・おろくの息子。彼の他にも兄弟は多数おり、今のところ後継者というわけではない。

堅物の生真面目。一本気で情に篤いがゆえに脇が甘い部分もあり、酒造の重屋山本半右衛門の前でも酒に酔って粗忽をやらかし、その始末にかの家の守護を約束した。

若輩とあって、江戸時代の中ごろに禅達と団三郎が繰り広げた佐渡貉天下百番勝負には不参加である。現在は団三郎の息子として立派に相川のニッ岩御殿の管理を行っている。好物は油揚げであるが、団三郎が大の狐嫌いであることからあまり公言はしていない。



【関の寒戸（せきのやぶこ）】

佐渡貉四天王の一人。佐渡北方の関集落に左武徒大明神として祀られる美人狸。ニッ岩団三郎の妻のひとりでもある。魔性の肌と呼ばれた美貌を持ち、人妖問わず多くの相手と浮名を流してきた。一方で団三郎の寵愛も深く、佐渡の貉総大将はたびたび相川から彼女のため関集落まで廻船を雇い、荷を運ばせたという。

お杉という人間の娘に化けて多くの男を誑かしたものの、貉の掟である「余所者に肌を許してはならない」という禁を破って、庚申の晩に能登の船頭と船の中で寝てしまった咎により、関の社殿の大岩から離れることができなくなった。

しかしその程度でまったく懲りる様子もなく、もっぱら配下の貉や財喜坊の術を使って佐渡の各地を見聞させている。軽薄に見えるがノリが良く面倒見も良いためおろくとの仲も良好。加えてかなりの酒豪であり、好物のどぶろくを作らせるため、人間の信徒に社殿のすぐ前に酒蔵を建てさせている。



【八代目六右衛門（はちだいめろくえもん）】

徳島の狸界において、金長と鎬を削ってきた化け狸。津田浦の六右衛門狸は小松島金長狸同様、世代交代と共に後継者が襲名する狸の名跡であるが、六右衛門は二代目を継いだのが彼の息子の千住太郎であったことから、血縁による相続が基本である。八代目はすでに百五十年以上もその座に留まる老狸であり、幕末・明治の激動以後も五代目、六代目、七代目の歴代金長と争ってきた。老いてなおその妄執は日に日に強まり、初代より続く六右衛門の怨念に囚われつつあるのではないかと噂される。

【萬寿三郎（まんじゅざんろう）】

津田浦穴観音の秘蔵っ子にして、いずれ九代目六右衛門を襲名すると目される幼狸。両親に二人を事故で失い、後継者として穴観音の城の奥深くで育てられた。祖父の八代目六右衛門から歴代の金長狸との確執を言い聞かされたため、金長一派に対しての怨恨は深い。さらに、彼の姉である美代が金長一門の若狸に輿入れしたことから、金長一派に並々ならぬ憎しみを抱いている。



【喜左衛門 (きざえもん)】

愛媛壬生川は大氣味神社の老木に棲む東伊予きつての大化狸。長い修行で身に付けた変幻自在の神通力をもって、怨霊の祟りを鎮め調伏するなどの功を立て、大氣味神社の簀族として祀られるに至る。屋島の太三郎と化け勝負をしたことが縁で親交を持ち、四国狸を率いて日露戦争の出征にも参加する。

大陸では無数の小豆を赤服を着た不死身の兵隊へと化けさせて指揮し、ロシア帝国軍をさんざんに苦しめた。当時の指揮官クロパトキンの日記にもこの赤服の兵隊に関する記録が残るという。

また、長福寺の住職南明和尚に師事した時代に和尚から囲碁の教えを受け、その腕前は狸界一と噂される。人間の碁会所に入り浸り、有望な少年を見つけては育てるのが趣味。

【小女郎狸 (こじょうらぬき)】

東予新居浜は一宮神社に祭られる美人狸。屋島の太三郎の妹にあたり、四国狸界においては彼に次ぐ重鎮であるのだが、大物らしからぬ腰の軽さ、親しみやすさ、細かいことを気にしない大らかさから多くの狸達に慕われている。

旅好きと美食家としても知られ、遠く大阪や京都までも足を伸ばしては、ふらふらと地元の名狸を訪ねて回る。一宮神社の大楠には信仰が引きも切らないが、大体社を不在にしてあちこちに出かけ、旅先から報告があったと思えばトラブルの苦情ばかりという有様に、太三郎は頭を抱えている。

【赤岩将監（あかいわしやうがん）】

徳島川田村にその名を知られ、阿波の狸番付では禿狸に次ぐ大物とされる名狸。吉野川の森の支配権をめぐって、対岸の白川神社を根城にする伊沢の鎮十郎と相争い、互いが率いる狸の軍勢のぶつかり合い、その陣中の合戦模様は人間たちの世にも多く記録されている。

また彼は狸界きつての名医でもある。狐狸の伝統的治療法だけに留まらず、人間の医術を学ぶために江戸に留学し、蘭学や中国漢方と霊力による癒しを融合させ、今日の狸の医術の進歩に大きく貢献した。日露戦争への出征にも同道し、大将自ら自軍の部下たちの傷を一人ひとり治して回ったという。



【犬神中将（いぬがみちゅうじょう）】

隠神刑部の実子。母は刑部狸の寵愛を受けた雌狸であるが、狸界の表舞台から身を引いていた父の立場を慮って、母と弟と三人で松山の黒森山深くに隠棲していた。

壬生川の喜左衛門から己の出生の秘密を知らされた知った彼は、昨年屋島総合狸大学の門を叩きだして教官一同を驚愕させた。入学して以後はたちまちその才覚を存分に見せ、飛び級で三年狸の主席となる。また、狸大学の毛球選抜チームでエースを務める。

弱冠十二歳にして父譲りの英雄の相を備え、多くの良き友、良き師に恵まれてめきめきと実力をつけ頭角を現しているが、四国狸会にあつて彼の存在が各勢力の権力闘争に大きな波紋を呼ぶことは必至であり、今後の動向が注視されている。また、伏見の化け狐と深い因縁があり、過去何度が刺客に命を狙われたこともあるという剣呑な話も漏れ聞こえる。



【花柳大膳（かりゅうだいせん）】

高知は八州大善神社に土佐鎮守の眷属として祀られる、土佐きつての名狸。

狸火による妖術や、呪い返しなどの術に長ける。かつては土佐の各地で無法を働き、悪名を馳せたことで知られたが、五台山竹林寺の住職に「人のために生きよ」と大膳神社の門前に石像として封じられた。以後はその教えを守り、心を入れ替えて門前狸を務めている。八洲大膳神社の池ノ上に建てられた毘沙門堂には花柳界の名門を招いて料理をふるまうなど、食通の間にも名を知られ、国境を跨いだ伊予狸番付においても阿波の六右衛門、金長などと並び客分として記されている。

幕末にあつては土佐の坂本竜馬より直々に薫陶を受け、彼の死後は愛銃のリボルバーを手には海を隔てた列強との戦いにも奔走した。日露戦争にあつては竜馬の姿を借りて時の美子皇后の枕に立ち霊言を授け、日本海海戦の大勝利に貢献した。

no
image

【守鶴（しゅかく）】

上野国館林は茂林寺に祀られ、至宝・分福茶釜の伝説で知られる、おそらく日本でもっとも有名な名狸。釈尊の生まれる前より生きるともいい、その生年は二千五百年も昔。彼の説法を聞き鶴に化けて大陸とも行き来したという規格外の伝説を持つ。

白雪のごとき白髪と、白い肌の姿は狸らしからぬ神格に満ち、その性別を超越した魅力は見る者の心を奪う。またその両の眼はほとんど光を失っており、化力をもって外界を見聞きするという。

彼女への信仰は狸界においても群を抜いており、かつては帝が参拝し、最寄りの鉄道に駅を作らせたことでも知られる。現在も門前には狸を祭る店が市を連ね、汲めども尽きぬ湯釜の分福茶釜は毎日のように参拝者でにぎわう。境内には無数の配下狸が暮らしており、彼らを養つために寺の横には河川と湿地帯を広大な領地を保有している。

本邦における狸界の御意見番のような立場にあり、離島である佐渡や四国という立地条件なしに、内地に確固たる勢力を保つその名は多くの狸たちにとって崇拜と尊敬の対象である。

no
image

【六代目金長（ろくだいめきんちやう）】

徳島の狸の名門、小松島の日開野金長狸を襲名した六代目。きつての武闘派で知られた五代目金長の没後、四分五裂した徳島の各狸組を取りまとめた。やくざ狸と揶揄される徳島の狸界において過去に類を見ない温和な方針を取り、戦前、戦中を通じて融和策に努めた。

太平洋戦争の後には、人間たちの戦争に懲りた狸達の信頼を集め、徳島狸の名狸会を発足。三代目金長以来の合議による統治を復活させている。

多摩狸騒動においては要請を受け屋島太三郎、隠神刑部と共に参戦するも、妖怪大作戦の失敗による戦後処理を一手に引き受け、徳島へと帰還した。

その後、敗北の責任から引退し七代目に跡目を譲ったが、現在でも健在で、その影響力は小松島、津田方、吉野川の阿波全土において大きい。なお京都狸界の重鎮・偽右衛門や南禅寺とも親交が深く、京都名門の若狸は伏見の狐との確執を避け金長の後見で徳島に渡り修業を積むことが多いという。

no
image

【藤の木の小鷹（ふじのきのこたか）】

阿波狸の総大将、日開野金長の腹心にして一派の補佐を務める若狸。現在の日開野の若い狸達の取りまとめ役でもある。小鷹狸の名は初代金長以来、歴代の金長が最も信頼を置く狸が襲名する慣例となっており、七代目金長が選んだ現在の小鷹は八代目に当たる。若年ながら持ち前の反発心でこれまでいくつもの修羅場を潜り抜け、向

こつ傷と狸一倍の度胸をもって一目置かれている。

当初は多摩の出身である七代目金長を余所者と嫌って強い反発を見せ、若狸たちをまとめ実力行使まで伴って彼の追い出しまで画策したが、決闘の後に七代目の心根の強さと信念に心打たれて態度を改め、彼を認めて義兄弟の杯を交わす。

現在は金長の第一の忠臣として阿波狸達の統一を夢見て日々走り回っているが、感情が先走りすぎるためトラブルも多く。古参の狸達とはそりが悪い。

【赤池緋鯉之助（あかいはびのすけ）】

徳島江田川の畔、赤池の社に祀られる名狸。緋鯉之助は狸界にあつて水練を得意とした珍しい狸であり、化術を磨いてついには巨大な緋鯉に化ける術を修めその名を得た。水の中での働きは随一と知られ、天保の阿波狸合戦においても金長方で多くの活躍をした。

現在の緋鯉は数代の断絶を挟んでの四代目であり、まだ年若く小鷹とも旧知の仲である。彼らを含め七代目金長を慕う狸達は総じて若年が多く、五代目以前から仕えている古参の狸達とは距離が開いてしまっている。

【高洲の隠元（たかすのいんげん）】

別名を旭大明神。沖州の港に社を持ち、高入道に化けては漁師を驚かせ、相撲勝負を申し込んで困らせた一方、時には海に出て漁を手伝ったともされる。魚に目がなく、阿波の海の幸を一手に握る狸港の元締めでもある。金長、六右衛門に次ぐ信仰を持ち、彼がどちらの派閥に属するかで両者の力関係も動くと言われる大狸。阿波狸合戦当時から存命の最古参であり、既に第一線を退いて久しいが、金長、六右衛門の双方が代替わりをしている中で当時を知る狸であるため、却ってその意見は重く立場は重要なものとなっている。

【善光寺の灯籠狸（せんくうじのとうろうだぬき）】



善光寺門前、白蓮坊のむじな灯籠を守る狸。元の生まれは下総であつたが、殺生をせねば生きられない畜生の身を嘆き、来世に生まれ変わるための功德を積もつと、人に化けて善光寺に参詣、その宿坊である白蓮坊に灯籠を寄贈した。

灯籠に灯るのは狸の天火であり、各地の伝承で知られる通り道に迷った人間たちの行く手を照らし導く明りである。いまではむじな仏とも呼ばれる彼と共に、多くの眷属たちが灯す狸火の明かりは善光寺に詣でる人々の安全を見守っている。

【本陣狸大明神（ほんじんたぬきだいみょうじん）】



北海道は薄野、狸小路に祀られる狸。その父は八百八狸隠神刑部、母は山口霊神にほど近い伊予の宮の瑠璃姫。妻は証城寺の証和大明神と鹿島月の宮の白浜姫の間に生まれたかずさ御前という、狸界の超エリートである——という設定で、近年になって狸小路に祀られるようになった狸。これらの伝説には松山の名誉狸、富田狸通が関与した。

近年本身を取って姿を見せるようになったが、ギャングブルに目がなくいたってチャライ様子の今どきの若狸。立場を考えずに軽率な行動も多いが、物怖じせず交流を好む祭り好きな性格は、古狸達からも比較的好意的にとられているようだ。建立は新しくとも現地の信仰は確かなもので、北の大地に住む狸達のよりどころとなっている。

【八俣お袖（やまたおそで）】



松山城下の堀端に社を構える雌狸。上野町の金平狸と共に隠神刑部の名代を務める。気まぐれで老婆の眼病を治して深い感謝をされたことを切欠に、その癒しの神通力が人々の間で噂となり、面倒見良く人助けをするようになった。好物は酒と蜂蜜。いまも病氣や怪我に悩む参拝者が後を絶えず、社はいつも栄えている。また、社殿向かいが松山市役所ということもあって、いつしか行政事務の守護まで引き受けるようになった。

狸は列車を好むが、彼女は特に松山の路面電車を愛し、路線敷設のため住まいの榎の太木を切られる時も喜んでこれに応じた。以来、女学生に化けてちよくちよく社前の駅を乗り降りする彼女の姿が見られる。

【金平狸（きんぺいだぬき）】



上野町大宮八幡のビヤクシンに住む狸。真面目な性格に勤勉で知られ、古今の故事や律令に通じ、博覧強記では四国随一とも噂される。その影響からか彼の配下の狸達は皆語学算術に長けた者たちばかりであり、私塾からは屋島狸大学にも毎年多くの入学生を送り込んでいる。

明かりを作って夜道を照らすなど、人間を愛し礼儀を重んじ狸の地位向上にも努めているが、同輩のお袖などからは狸らしくらぬ行いを堅苦しいと揶揄されることも。お袖と共に刑部狸の不在を守り、その名代として松山の狸達をまとめている名狸である。

【偽右衛門 下鴨総一郎 (にせえもん しもがもついちろう)】

全国稻荷狐の総元締、伏見稻荷一門の絶大な勢力下にある京都において、狸谷山不動院の古老たちと共に千年王都の狸界の頭領を背負って立った名狸。その高名さと底抜けの明るさ、化術の巧みさは各地の名狸達をして一目置くほどであったという。

数年前に、人間たちの秘密結社である金曜会の陰謀によって狸鍋にされ命を落としたが、その息子達は偉大なる父の伝えた「阿呆の血」のもと逞しく生き抜いている。



【下鴨一家 (しもがもついか)】

総一郎亡き後に偽右衛門を襲名した下鴨矢一郎をはじめ、矢二郎、矢三郎、矢四郎の四兄弟と、彼等の母・下鴨桃仙。

糺ノ森に棲み、狸谷不動、南禅寺や夷川一族と共に現在の京都狸界を代表する狸である。如意ヶ嶽薬師坊をはじめ天狗達とも交流を持ち、時に京都の妖怪たちも仰天する大騒ぎを起こすことから、彼らの「阿呆の血」こそ、まこと狸の中の狸と称賛が寄せられている。



折葉坂三番地／銅折葉

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

狸イラスト：enclosed0様（草枕文庫）

(<http://www.pixiv.net/member.php?id=53128>)

表紙素材：おぎきゆうこ様

(<http://www.pixiv.net/member.php?id=3010169>)